

ちば環境情報センター

C E I C



2026. 1. 7 発行

ニュースレター第341号

〒262-0019 千葉市花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX:043-483-0027 代表: 小西 由希子

E-mail:yatsudasukisuki@gmail.com , Home Page:<http://www.ceic.info/>

写真等無断転載禁止

食品ロスについて

今、物価高で食料品の値上がりが著しく、消費者は日々の家計のやりくりに苦労していますが、その一方で、日本では食品ロスの多さが問題になっています。食品ロスというのは本来まだ食べられるにもかかわらず廃棄される食品のことと、1年間で464万トンが廃棄され、そのうち家庭から排出されているのがその半分の233万トンだそうです。(令和5年度、環境省の統計より) 国民一人当たりに換算すると、一日、小盛りのお茶碗1杯分の量だそうです。家庭からなぜそんなに出るのか不思議に思われる人が多いと思います。そこで、その原因について私なりに考えてみました。

第1番目は冷蔵庫の中の奥に食品を入れてしまい込み、気が付いたら、消費期限が過ぎていたということがあるのではないかと思います。私も良くやるパターンです。これについてさらに考えてみると、最近、忙しい人が増えているのに伴い、買い物の回数を減らし、1週間に一度まとめて食料品を買うことが多くなっているのではないかと思います。あるいは生協などを利用し、1週間に1回食料品がどつきり届くということが行われているのではないかと思います。私もそれを利用しているのでその便利さはよくわかるのですが、冷蔵庫や冷凍庫をきちんと管理し、中に何があるかが良くわかるように頭の中に入れておかないと、いつの間にかあれ、これ、いつ買ったのかな?ということになり、消費期限が切れて、ごみ箱に行ってしまうということになってしまいます。つまり、**冷蔵庫の見える化**と中の物をきちんと管理することが必要なのです。これは家計にも直結します。

一般的に冷蔵庫の中は**7割以下**しか入れないのが望ましく、逆に冷凍庫は**8割以上**占めるように食品を入れることが望ましいといわれています。冷蔵庫に7割以下にしておくと見通しが良いだけでなく、冷風が行き届きやすくなります。また冷凍庫に8割以上食品があると、中にある物は溶けにくく、電気代が少なく済むといわれています。なので、もし冷凍庫がスカスカの場合は、水を入れたペットボトルを入れておくと、災害などで停電になったときも食

船橋市長 正子

品がすぐに解凍せず、またペットボトルの水は飲み水として利用することができます。また冷凍庫に保存するときは日付を書いておくことが大切です。

2番目は消費期限と賞味期限の区別を理解していない人が多く、賞味期限が切れたと言ってすぐに捨ててしまう人が多いということがあげられます。



ちば環境情報センターが講師を務めたエコクッキング講座。課題は食品ロスを強く意識してもらう(2025年2月12日花見川公民館)

消費期限は主に生鮮食品、魚や肉など傷みやすい食品につけられる期限のことと、その期限内に食べないと安全性が保たれないという期日です。一方、賞味期限は普通の保存された状態で美味しく食べられる期間のことをいい、その期間が過ぎたら、すぐ食べられなくなるわけではありません。カップヌードルやお菓子、チョコレート、はてはビールなどでも賞味期限が切れたといってすぐに捨ててしまう人がいますが、これはとてももったいないことです。メーカーは賞味期限を短めに設定していますので、1か月～2か月過ぎていてもお腹をこわすことはありません。防災のために備蓄している缶詰や袋めん、レトルト食品なども賞味期限が過ぎたといって機械的にぱっぱと捨ててしまう人がいますが、安全性に問題があるわけではなく、多少萎びれていることはあるかもしれません。即、食べられないわけではありません。ぜひ捨てる前にまだ食べられるのではないかと考えてみてください。ちなみに私は1年過ぎたチョコレートやビールを飲んでみましたが、大丈夫でした。多少お腹まわりが大きくなつたという

ことはあるかもしれません。

3番目は野菜や果物の皮を厚くむいて調理する人がいます。しかし、野菜の皮には栄養が蓄えられていることが多い、たとえばサツマイモの皮にはポリフェノール、リンゴの皮には血圧を下げるカリウム、ニンジンの皮には抗酸化作用のある β -カロチンなどが含まれています。野菜の皮は捨てれば野菜くずですが、食べれば栄養になります。どっちになるかは料理人の腕次第です。

ちば環境情報センターが公民館などから受託して

いるエコクッキング講座では代表の小西由希子さんが講師を務め、サツマイモの皮で芋ケンピを、カブは皮も葉っぱも使ってサラダを作ります。とても美味しいです。ゴミも減量され、一石二鳥です。私はさらにどうしても捨てざるを得ない野菜くずは庭に穴を掘って埋め、堆肥にしています。そうするとゴミの量がさらに減ります。

食べものは大事な資源です。食品を大事にして食品ロスを減らしましょう。

地域資産としての東京湾三番瀬猫実川河口沖の干潟再生 －保全生物学と地域づくりの視点から－ その4

三番瀬環境再生の方向性

三番瀬の環境保全に関しては「三番瀬円卓会議」でも、干潟再生の視点に立った議論が行われ、三番瀬の環境再生のイメージ図を出している。しかしながらその中で湿地、干潟再生の候補地である猫実川河口沖では、置き石護岸による現状維持を目的とした保護区域の設定も提案されている（図-5）。この海域は現在ほとんど干出することのない水面であるが、一部で大潮時ののみ干出する泥干潟とカキの密生したいわゆるカキ礁が存在する。またその周辺にはアナジャコや千葉県レッドデータブックで重要保護生物と扱われたウネナシトマヤガイなどなどさまざまな生物が生息していることで、現在の環境と生物相の保護を主張している。

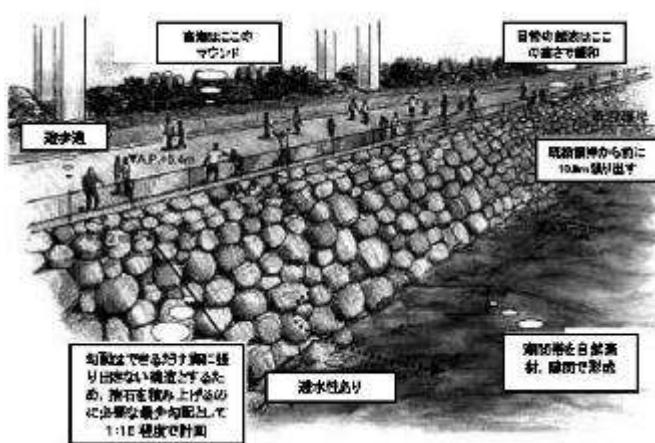


図-5 「田嶋会議」での猫塞川河口周辺の護岸改修案

現状維持による環境保護と人工的干潟再生の間では、環境に期待する将来像において根本的な違いがある。現状維持ではこれまでの干潟消失ならびに干潟内の地形的多様性の減少による各種生物のネットワーク機能低下が長期的に影響し、今後も生物群集は変化し続けることを許容することになる。一方、人工的な環境再生では現状の環境改変であり、生息

東邦大学名誉教授 風呂田 利夫

環境変化により失われる環境と、創出される環境の質的差異について比較分析する必要がある。図-6に猫実川河口沖を河口湿地や干潟にした場合に期待される生態学的な質の変化予想を示す。

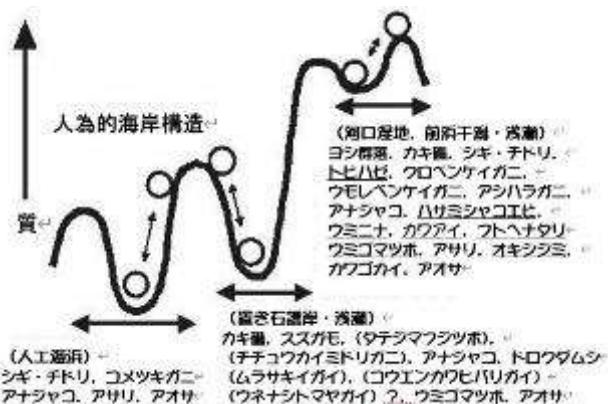


図-6 海岸地形改変による生態系の質的变化範囲の予測

() : 外來種, () : 希少種

この場合の質についてはその場所全体での地形的自然度と在来生物多様性が評価軸で、生物群集の搅乱要因である外来種はマイナス評価としている。置き石護岸は干潟環境とは大きく異なりマガキなどの在来の付着性生物種とともに、エゾカサネカンザシ、ムラサキイガイ、ミドリイガイ、コウロエンカワヒバリガイ、タテジマフジツボなどの外来付着生物種の生活場所を提供する。またカキに付着しているウネナシトマヤガイは、湾奥では置き石間にも豊富に生息する付着生物で近年急激に密度が増加したことから、同種ながらも東京湾にとっては人為的に持ち込まれた外来生物である可能性も指摘されている。一方河口湿地を含む自然形状の干潟を造成した場合、現状のカキ礁の規模は減少するが、再生した湿地や干潟部には現在の小櫃川河口ならびに三番瀬周辺干潟での生息状況から見て千葉県では絶滅危惧種であるハマガニ、最重要保護生物であるトビハゼ、ウモレベンケイガニ、ウミニナ、カワアイ、重要保護生物

であるオサガニ、要保護生物であるハサミシャコエビ、ベンケイガニ、ソトオリなどの希少種とともに、クロベンケイガニやアシハラガニなど人間となじみの深い一般的な種の復活が期待され、三番瀬の生物群集としての生物多様性の増加が期待できる。またこれらの干潟生物の新たな生息域ができることで、東京湾における干潟ネットワーク機能の増加が期待される。さらに、さらにこの三番瀬では毎年の様に無酸素水の湧昇接岸（青潮）による生物の斃死が見られるが、干潟に変わることで干潮時の干出面積が増加し酸素供給が促進されることで、青潮被害の軽減も期待される。したがって、この水域の干潟への復元は、保全生物学的視点としては生態系の基盤変革（レジームシフト）となり質的向上が期待できる。

しかしながら人工的な干潟造成に関する社会的

三番瀬猫実河口沖における干潟環境の再生

(1) 猫実川河口沖の湿地、干潟造成

先に述べたように、干潟は河川からの土砂の大量供給によって形成される。したがって土砂供給があり、その土砂を保存できる河口部では干潟が自然に復活し成長する。養老川河口を例にとると、1991年から2003年の12年間に、干潟先端部が沖に向かつて約150m進出し、この間の土砂堆積量は53.7万m³（4.5万m³/年）と推定されている。

現状での三番瀬における土砂供給源は江戸川放水路に限定されている。浦安に開口する本流を含め江戸川全体では、干潟の構成材料となる細砂、中砂の供給量は26.9万m³/年と推定され、そのなかで放水路経由の土砂供給は2000年を中心とした近年10年間の5回の増水では、1回平均約5.4千m³と推定されている。この土砂は航路を塞ぐため、定期的な浚渫による除去が行われており、干潟成長の材とはなっていない。また増水時の放水路開門放水は、放水路両岸の干潟浸食により干潟生物の航路底への流出死亡を生じさせており、流出した生物の逃げ場としても三番瀬での干潟拡大が望まれる。一方、三番瀬の最奥部にあたる猫実川河口沖は、現状では河川からの土砂供給はほとんどないものの、供給があれば閉鎖的な海岸として干潟化しやすい地形である。したがって三番瀬の望ましい環境修復としては、江戸川放水路の開口部の干潟化がより望ましい計画である。しかしながら、放水路開口部の干潟化は港湾や航路の干潟化は現況の港湾機能の停止を意味し、直ちには実行できない。このように猫実川河口沖海域での干潟環境の造成は、三番瀬における環境再生において本来干潟化する江戸川放水路開口部での再生が社会的制約から見込めない場合の「次善策」であることを理解したうえで、市川港や航路浚渫による土砂の移動覆土による河口湿地と干潟の再生が望まれる。

(2) 現状保全案と再生案との比較整理

表-2は両案の項目ごとの評価比較である。円卓会議提案では海岸の自然歴史的過程や環境の連続的

不信感は根強い。その原因是、造成そのものが環境の搅乱であり、完成後も非予測的な影響や環境の不安定性により生態系の回復を疑問視していること、さらには造成資材確保による他所の環境破壊の危険性にある。しかし先に紹介した人為的に造られた干潟の現状をみても、海岸形状と生物群集の再生は十分に期待できる。当然のことながら予想外の現象が生じることも認識すると同時に、改善に向けた活動を環境と住民の新たな関係づくりの機会として活用する必要がある。そして造成の基質となる土砂については、後述のように東京湾では河口部を中心に港湾機能維持のための定期的な浚渫により得られる浚渫土砂、あるいはかつての海底砂により造られた埋立地からの残土等の利用が考えられる。

変化はほとんど表現されていない。また、外来種はかえって増加する可能性が高い。

表-2 猫実川河口沖の改修に関する円卓会議案と干潟再生案との評価比較。×：向上が期待できない。△：向上がやや期待できる。○：大きな向上が期待できる

	現状形状+置き石護岸	河口湿地+前浜干潟
（保全生物学的視点）		
自然の歴史的過程	×	△
環境の連続的变化	×	○
生物多様性	△	○
希少種保全	△	○
外来種の排除	×	○
（社会的視点）		
景観回復	×	○
生物資源	△	○
環境学習	△	○
環境研究	△	○
安全確保	×	○
塩害防止	×	△

さらに景観価値、生物種保全、環境の学習や研究的利用便宜においては干潟復元の方が圧倒的に高い価値を有する。そのうえ海岸の人的安全性ならびに波の飛散による塩害防止においては、長距離の緩傾斜海岸域としての河口湿地や干潟の造成が強く望まれている。このように、各要素の比較において湿地、干潟再生により高い評価が得られる。そして何よりも、現状の置き石護岸もしくはコンクリート護岸は人と海の関係を断絶している。干潟は市民特に子供たちにとって安全に海の環境の楽しさを体験できる場である。海から得られる生態系サービスを享受するための基本として干潟再生が強く望まれる。

復元した干潟は長期的に変化を続け、ときに期待どおりの成果を得られない可能性もある。このような新たに生じる問題は想定内の問題とし、発生する問題に対し順応的に対応しなければならない。そのためには地域の住民、行政、そして研究教育関係者の協働的な関与と行動が不可欠である。そしてそ

の行動の継続こそ、自然環境と人間社会の関係の経験を深め、人材育成を通じた環境の有効活用である。

数多くの環境問題を抱え人間生活から隔離された東京湾、そのなかで絶滅が続く干潟生物、人間が傷つけた環境の修復は人間社会の責任である。その環境修復や再生に向けた取組みの過程を環境修復の社

会的経験の蓄積と地域住民の環境意識の成長のために、三番瀬における干潟の再生とその有効活用について将来の東京湾と地域との関係づくりや人材育成を視野に入れた干潟再生策の確立を切望する。 完

(ふろた としお. 東邦大学名誉教授)

市川市的人工干潟造成問題、その後

市川緑の市民フォーラム 事務局長 市川市 佐野 郷美

ちば環境情報センターのニュースレターに何度か紹介させていただいた「市川市的人工干潟造成問題」であるが、新たな局面を迎えてるので報告させていただきます。

簡単に今までの経過を復習します。

東京湾最奥部の海“三番瀬”は干潟と浅瀬の約1,800haの海域です。ラムサール条約の登録湿地の条件を満たし、千葉県が発表した三番瀬埋立計画を県民が白紙撤回させた「守られた海」です。その三番瀬の浅海域である市川市塩浜2丁目前面の浅海域に幅100m×奥行50m(0.5ha)の人工干潟造成計画を2023年夏に市川市が発表しました。理由は「市川市には海があるのに、海と直接触れることができず、市民が憩う親水施設建設は市にとって長年の悲願」ということでした。

この突然の報道に対して、私達「市川緑の市民フォーラム」だけでなく多数の市民の会が市に対して「市民が海に触れ合える自然干潟がすでにある。人工干潟はいらない。」と要望し、現状では1万3千筆以上の署名も提出しています。

しかし、その後も人工干潟造成計画をやめようとはしません。すでに、造成予定地に6月から7月に真っ黒で悪臭を放ち、ダイオキシン等の有害物質を含む市川航路浚渫土砂1万m³を投入し、体積の状況の変化等のモニタリングを始めました。問題がなければ、2027年度には完成させる予定です。

ただ、その浚渫土砂投入を始める直前に、市長は「自然干潟を市民が憩えるようにする」と述べ、我々の要望の一つを受け入れたのです。

そこで、当フォーラムはこの局面で、市川市及び市長に対して、①市民が海に直接触れることのできる自然干潟があることを認め、それを整備することに感謝するとともに、その整備は“生物多様性の保全”を前提に実施することを求め、市民が海に触れ合える場があるのであるから②人工干潟造成は必要ない、という要望をするつもりでいます。

そのような状況の中で、先日10月25日(土)市川文化会館にて、「三番瀬人工干潟意見交換会」が開催された。会場は参加者でいっぱいになり熱気を感じた。実行委員長(市川三番瀬を守る会の会長)から、三番瀬を守る連絡会が作成したパンフレット「三番瀬が大ピンチ」を使って、改めて市川市的人工干潟造成計画に何故反対するのかを確認しました。

その後に、市川緑の市民フォーラムは、会報10月

号の特集「市川の海、海沿いの市所有地3.8haをどうする?」に掲載した、当フォーラムが市川の海辺で実現したいと考えているプラン(下図)を紹介しました。

この意見交換会を主催した「市川三番瀬を守る会」や当フォーラムを含め8団体は、「人工干潟造成事業の中止」を求めており、当フォーラムとしてもまずはっきりと「人工干潟はいらない」と述べた上で、「行徳地区の歴史と文化も生かしつつ、造園学会等で議論が始まっている“汐入庭園”文化にも繋がる、かつて海であった場所(埋立地)を再び海域環境に戻すプラン」を図で示したのです。

発表後参加者から①千葉県野鳥の会の会報にもぜひ紹介したいので原稿を依頼したい、②「ラムサールネットワーク日本」の役員にこのプランを紹介する、③市川市が海岸沿いの市所有地3.8haで経過を記している5つのプール(サーフィン・プールを含む)・レストラン・BBQ場を作るプランより魅力的、④人工干潟造成反対だけでなく、対案を示すことは大切、このプランは素晴らしいので、私もこのプラン実現のために協力したい、等の嬉しい意見を次々といただいたのです。(なんと日本自然保護協会も関心を示して下さり、機関紙「自然保護」の2026年1・2月号にも掲載されました)

その後、当面の行動予定、署名内容等が決められ、最後に“アピール文”が大きな拍手で採択されたのですが、参加された皆さんのが反応を見て、改めて「当フォーラムの提案」について多くの市民にこのプランをわかりやすく紹介し、広く市民に応援してもらえる形にして、できるだけ年内に市川市へ要望書という形で提出したいと考えているところです。

最後に、上に書きましたが、「造園学会等で議論が始まっている“汐入庭園”」はまさに1970年代以降にアメリカ、イタリア、イギリス、デンマークなどから始まった「必要ななくなった埋立地や干拓地を再び海域環境に復元する」事業の日本版とも言えるものです。以下は、造園学会のシンポジウムの案内文の一部です。

…歩行者デッキから庭園と海が見られる新しい風景が出現、今後は海面上昇を想定した新しいまちづくり、都市と海の新たな繋がりが考えられる。江戸時代、都市機能の中心にあった潮入り庭園は、今再び海と繋がろうとしている。我々は潮入りを復元し、ソフト・ハードの取組を通じて庭園群を活かした「文化財庭園都市」をつくること目指している。

どうでしょうか？三番瀬の自然環境を守り、次世代に引き継いで行きたいと考えたとき、もう土木の世界と自然・生物多様性の世界は一つの土俵で議論できるのではないかでしょうか？まさに海に接した都市での“Nature Positive（自然再興）”の具体的な事業にしていこうではありませんか？

★汐入庭園（しおいりていえん）：海から、あるいは海に近い河川から水（海水または汽水）を導いて、水位の変化する風情を楽しめ、海の生きものが見え隠れする池を取り囲むようにして作られた庭園で、今も汐入になっているのは都内の「浜離宮」以外に、広島、山口、和歌山にも残っている。



生物多様青年、冬の活動報告

大学の実習で、12月10日(水)に東京ビックサイトで行われたエコプロ2025に行ってきました。

化学系の授業の実習でしたので、時間をかけて見学したのは環境にやさしい新素材を使った製品や、CO₂回収技術がメインでしたが、自然・生物多様性関連のブースも数多くあり、とても興味深いイベントでした。

中でも、北海道苫小牧市でCCS技術の実証実験をしている、日本CCS調査株式会社のブースが興味深く、色々なお話を聞きました。

CCS事業といえば、首都圏CCS事業の問題が12月号のニュースレターの一面を飾りましたが、日本CCS調査株式会社は例の事業者とは別の会社です。

お話を伺った方と名刺を交換し、ニュースレターを軽く見せて事情を説明してから、この事案についてどう思われるかお訊きました。

ニュースレターで指摘された技術的側面や莫大なコストの課題については、CCS事業と技術の概要を説明していただきました。そこで、CCS事業そのもの

-エコプロ2025-

千葉市若葉区 鈴木 郁也

は、概ね技術的な課題や採算などはクリアしていると答えられました。

一方、CCS事業の実証実験や社会実装に向けて、最も注意を払っているのが、やはり地元の方々の合意とコミュニケーションだと話されました。

北海道苫小牧市の事業は沿岸部に巨大なCCS施設があり、さらに人が住んでいる街とかなり近くにあるそうです。そこも首都圏CCS事業と同じく海底に二酸化炭素を貯蔵する事業で、全体的な規模の違いはありますが、街まるごとの合意を得て行う事業だからこそ、胸を張って行える地球温暖化対策であると話されました。

その点、首都圏CCS事業の進め方は「単にやり方がヘタなだけ」と笑っていました。

近年嫌われがちな太陽光パネル・メガソーラーと同じように、せっかくの有用な技術なのに、一部の事業者のやり方で悪いイメージがついてしまうことも心配されていました。

新浜の話 95 ~年末年始~

遠い過去になった現役時代、年末年始のスタッフはただひたすらいくさでした。魚屋さんのお正月休みへの備えで魚アラを毎晩搬入し、ひと口大に切って袋詰めし、冷凍保存。しっかり凍ったものは大きいふたつきバケツに移して、解凍しかけたところで

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

順繕りに餌付け用に。時にはフル回転中の冷凍庫が故障して大騒ぎになったことも。傷病鳥舎の大掃除では、治療室の入院患者さんたちをぜんぶ中部屋や倉庫に移動して、ひとつおり掃除したところで、ゴキブリ燻蒸消毒。翌日は窓から床まで水洗いし（消

スローマン

作: あい
59



金魚が泳いでる



スローマンこの金魚



作者の不思議友達の家の実話です。「生態系」がキーワードだと思いますわ!....。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2026年2月号(第342号)の発送を2月6日(金)10時から千葉市民活動支援センター(千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階)にておこなう予定です。お手伝いいただける方は小西 090-7941-7655)までご連絡ください。

.....あなたも入会しませんか.....

住所

ふりがな
氏名

E-mail

会費の郵便振替口座は00130-3-369499です。

毒もやったかな?)、さいごに鳥たちを戻して(収容している段ボール箱などもすべて交換し)、新年を迎えます。合間に道のゴミを拾ったり、保護区の中のトラクター小屋等を片付けたり。

元旦には「初日の出の会」という催しをやっていました。もともとは、「初日の出とスズガモの帰還を見る会」。三番瀬から日の出前に保護区に戻って来るスズガモの大群を見ていただきたくて、東京メトロ(当時は営団地下鉄)が終夜運転をしている元旦に企画した行事です。塩浜岸壁から頭上をこえてゆく何万羽もの大群はほんとうにみごとでした。この時、私が(勝手に)担当していた大仕事はお汁粉と豚汁の提供。最初は大なべに1杯か2杯だったものが、参加者が増え、やがてどちらも100人分くらいは作るようになりました。お汁粉はだいたい暮れの30日には仕上げて観察舎の台所へ。豚汁は材料調達から始まって、いざ、作り始めるのは31日の深夜から。

大晦日、23時50分くらいになると、調理の手を止めて外に出ます。除夜の鐘も遠くから聞こえるのですが、私が待つのは午前0時の瞬間。海上に停泊して新年をむかえる船舶が、年明けの午前0時に一斉に汽笛を鳴らすのです。ディズニーランドの花火も上がりますが、暗い海上にひびく号笛を聞きながら、観察舎管理棟の前で新年の無事を祈って合掌するのが、今も続けている永年のならわし。

戻ってからは豚汁作り本番。手のかかるこんにゃくちぎりや里芋むきをあらかじめ手伝っていただいた時もありました。ただひたすら、大きな鍋に材料を順々に入れて煮るだけですが、時間をかけて大量に作る豚汁の味は格別。大鍋から具をとり分けてのぼし、なべ6つか7つにしていたかな。お味噌を入れて次々に味を見ていると、舌が馬鹿になって、だんだん味がわからなくなってきた(お汁粉も同様)。仕上げにおろししょうがを入れ、刻みネギは温めなおして提供する時に。

行徳ラジオ体操会が材料費のご寄付と餅焼きの手伝いを買って出られ、30年以上も続いた行事。臨時に観察舎を6時開館。暗い中からお客様が集まって日の出を待ち、初日の出に手を合わせます。7時すぎから豚汁とお汁粉のサービス。9時すぎに終了した後、しんと静まった観察舎のお掃除。

観察舎の台所で焼いていたお餅を焦がして、煙を感知した防火用のシャッターが下りてしまい、事務室から観察室に出ることができなくなってしまった。大あわてしたこと。スタッフ等々は初日の出の会に出てしまつて、観察舎でのお留守番は私ひとり。図書室の通用口から外に出てぐるっと回り、反対側の正面玄関から観察室に入ることはできるのですけれど。幸いにお客様はみな平然とされていて、焦っているのは私だけ。最初に戻って来られた故鈴木暁さんが仏さまに見えました。このシャッターは手動でしか上がりず、事務室の天井裏に上がってチェーンを引くのですが、一度に50cmくらいしか引けず、ぜんぶ上げるにはいつも1時間以上を要したものです。

2009年に今の家に越してからも何年かは続けていました。甘酒だけにした年も。2015年12月末からの観察舎無期限休館・廃館、そしてコロナ禍となる中、こうしたサービスは終了しました。

編集後記:あけましておめでとうございます。お健やかに新しい年をお迎えのことと思います。新年号は6ページの特別版でお届けいたします。ぜひご覧ください。2年間手入れできなかった田んぼを地主さんのご厚意で今年からまた耕すことができるようになりました。リスの森の手入れもこつこつ続けています。本年もよろしくお願ひいたします。
mud-skipper♀



下大和田・小山町谷津田だより -2026年1月No.287号-

【活動報告】

<下大和田での活動> 写真：田中正彦

第311回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い 2025年12月7(日) 快晴

報告：田中正彦

朝夕の寒さが身に染みてきました。9月に開花の記録がある植物は148種ですが、12月は40種と最盛期の1/3以下になっています。しかし、谷津田や森には、ナンテンやマンリョウ、ツルウメモドキなどが赤やオレンジ色の実をつけ華やかな一面もあります。フユイチゴは甘く実って食べごろです。冬鳥としてわたってきたアオジやカシラダカ、ジョウビタキたちも見ごろです。上空にはオオタカやノスリがよく現れるのもこの季節です。今回は赤い実を探しながら、初冬の谷津と森を散策しました。



最初、冬枯れの谷津田を歩きました。ガマの穂がはじけて、風に吹かれてたくさんの種子を飛ばしていました。「まるで小雪が舞っているようだ」と話す声が聞こえました。初めて参加した小学1年生の男の子が、まだはじけていないガマの穂をにこにこしながら崩して、その膨らんでいく様子を楽しんでいました。



森に入るとヤブコウジ、カラタチバナ、ガマズミ、カラスウリなども赤い実を付け、冬枯れの森を彩っていました。足元にはフユイチゴが実り、参加者一同冬の恵みを味わいました。最後に記念写真を撮影して、12時前に解散しました。初めて参加した方から「子供達も非常に楽しかったようでまた行きたい。我々夫婦も色々勉強させて頂き楽しかったです」というメールをいただきました。

参加者21名（大人14名、大学生2名、小学生4名、幼児1名）

森と水辺の手入れ「森の草刈り」 2025年12月28(日) 快晴

報告：平沼勝男

2回続けて雨で延期になり、三度目の正直で森の手入れをしました。久しぶりの青空でした。場所は東屋の後背地の台地の上です。大きな木のないこの場所はすぐに草丈が伸びてしまいます。



刈り払い機3台で除草。一人は。もう一人はまだ背の低いイヌシデの根の回りを掘り、根の様子の確認をしました。なかなか面白い作業で、木の根の張り方よくわかりました。次は根回しか、移植をしたいと思います。

参加者5名（大人4名、大学生1名）

【谷津田・季節のたより】 2025年12月

<下大和田町> 報告 平沼勝男

12/21 夕方 曇りのち晴れ：雨上がり、15時を過ぎたところようやく空が明るくなってきた。キジの囀りケーンケーンが聞こえた。ヒクイナも独特のさえずりを聞いた。皆雨が上がるのを待ちわびていたようだ。西の空に綺麗な虹がかかった。

12/28 朝 晴れ：全面凍結の田んぼの上をセグロセキレイが歩いていた。他に見た鳥はシジュウカラ、メジロ、アカハラ、ジョウビタキ、アオジ、ウグイス、キジバト、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、モズ、ホオジロ。

12/30 キジバト、ヒクイナ、クサシギ、ノスリ、アオサギ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、シロハラ、アカハラ、ジョウビタキ、スズメ、カシラダカ、アオジ、クロジ、コジュケイ、ガビチョウ。22種類の野鳥を観察しました。

<小山町> 報告 高山邦明

12/1 田んぼの中にたくさんのタネツケバナが咲いて春先のような光景、田んぼに猛禽に襲われたらしいキジバトの羽根が散乱

- 12/2 日中の田んぼにアキアカネ、マユタテアカネ、オオアオイトトンボが飛ぶ
 12/4 早朝冷え込んだ田んぼに氷が張り、畠に霜柱が立っていた
 12/5 田んぼの脇の木に 20 羽ほどのカシラダカが止まっていた。日中の日だまりに交尾したイナゴの姿、動きはにぶい
 12/10 畠の中にあるカキの実を食べにツグミとヒヨドリの大きな群れが訪れている
 12/11 久しぶりに田んぼにカワセミの姿
 12/12 オオタカが上空を飛翔
 12/16 林からノスリが飛び立つ
 12/16 日中、田んぼでナツアカネを見かける。これが今季のトンボの終認
 12/21 畠のカキの実が食べ尽くされ、ツグミを見かけなくなる
 12/27 ヒミズの死骸があった
 12/29 ヒヨドリがセンダンの実を食べに集まる、久しぶりにキセキレイを見る
 12/31 クサシギが田んぼから白い幼虫を次々と見つけて食べていた

【イベントのお知らせ】主 催：NPO法人 ちば環境情報センター

<下大和田谷津田> 連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655 , E-mail : yatsudasukisuki@gmail.com

・第312回 観察会とゴミ拾い

日 時：2026年 1月11日（日） 9時45分～12時 ※第2日曜日の実施です 雨天決行

内 容：冬鳥の観察を中心に、鹿島川合流部まで巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100円

注：自家用車で来られる方は、
いつもの駐車場が使用できませんのでご一報ください。

・第313回 下大和田YPP「新春 もちつき大会」

日 時：2026年 1月12日（月・成人の日） 9時45分～14時頃

場 所：下大和田谷津田

内 容：今年収穫した緑米で、臼と杵を使った本格的なもちつきをします。

持ち物：お皿、お椀、箸、コップなど

参加費：中学生以上500円、小学生300円

・森と水辺の手入れ

日 時：2026年 1月18日（日） 9時45分～12時 雨天中止

内 容：マイ田んぼ復活のための整備と森の木の整備などを行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・森の手入れ

日 時：2026年 1月25日（日） 9時45分～12時 雨天中止

内 容：森の木の整備や下草刈りを行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・第313回 観察会とゴミ拾い

日 時：2026年 2月 1日（日） 9時45分～12時 雨天決行

内 容：冬鳥の観察を中心に、鹿島川合流部まで巡ります。ニホンアカガエルの卵塊調査もします。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100円

<小山町谷津田>

第 238/239回 小山町 YPP「田んぼと林の整備」

日 時：2026年 1月18日(日), 1月23日(金) 10時～12時 ☆小雨決行

場 所：小山町谷津田（千葉市緑区）

持ち物：長靴（田んぼに入らないので長い田んぼ用でなくても大丈夫です）・軍手・飲み物

☆どなたでも参加できます。参加のご希望、お問い合わせは、ceic.ypp.oyama@gmail.com までメールでお気軽にご連絡下さい。

